

# 戦火に散ったアスリート ⑬

## 東京帝大野球部 東 武雄

### 球史に埋もれたフオークボール

大阪の公立きつての進学校である天王寺高校にも、戦争の犠牲となったアスリートがいた。サッカー部OBには日本代表・岡田武史監督、大正時代には大相撲の第26代横綱・大錦と多士清々、旧制・天王寺中学時代には、伝説の「東(あずま)4兄弟」がいた。野球部員だった末っ子・武雄は、東大に進むと東京六大学野球のスター選手に。しかし、戦地で倒れ、還らぬ人となった。

(新聞うずみ火・吉岡雅史)

### ノーヒットノーラン

1925(大正14)年秋に東京帝国大学、つまり現在の東京大学が参加して、東京六大学リーグが発足した。まだプロ野球は誕生しておらず、これが日本球界の最高峰だった。

リーグ全体の2試合目、法政中野球場で行われた法大との試合で、東大の東はレフト場外にあった民家の屋根を直撃する大ホームランを放った。しか

も先発投手として相手を1点に抑え、4-1で東大に初勝利をもたらした。

さらに27年春の立教戦では、ノーヒットノーランを達成した。リーグ史上20人(21度)の投手がこれまでに達成しているが、東が3人目。東大勢としては唯一ひとり成し遂げている。

東がいたころの東大は、今と違って他校とは互角に渡り合っていた。東がケガをしたシーズンは最下位でも、東が復帰すると、法大と立教の上を行き4位を確保することが多かった。当時としてはかなり大柄な身長178センチから、剛速球を投げ込んでいたようだ。打線の援護が少ない東大にあって、大学通算15勝(36敗)は、なかなかの成績である。

ちなみに、26年秋に完成した大学野球のメッカ・神宮球場での、被本塁打1号も東である。記録のところで、名前を残しているのがおもしろい。

### 中学時代から名投手として

医者の家に生まれた東は、天王寺中

展示物の中に、東の写真が飾ってあった。さらに「東京大学野球部史」が所蔵されていて、閲覧を願ったところ、東とバッテリーを組んだ清水健太郎氏の回想文が掲載されていた。

### 新事実発掘!

### 東がフオークを投げていた

〈東の野球は時代をはるかに越えて進んだものだった。第一彼は大そうなる研究者であった。主に米大リーグの有名選手の写真の切り抜きである。東は色々な新聞だの雑誌をアチラから取り寄せていて、目ぼしいものを片っぴしから切り抜いて集めていたのだ。〉(中略)或日東は私にひそかに言った。「変

学時代から名投手として名をはせた。

中学に入学した1915(大正4)年に、夏の高校野球の前身である全国中等学校優勝野球大会が始まっている。天王寺にはすでに野球部があったが、当初は全国大会予選に参加していない。

『天王寺高校野球部史』によると、予選初参加は第4回大会の18(大正7)年。天王寺は1回戦を大阪貿易に20-0で圧勝したが、2回戦で北野に5-7で敗れた。

翌19年は東にとつて中学最終学年。北野、市岡の強豪を下して準決勝に進出するも、明星商に1-2で惜敗した。当時は単純なトーナメントではなく、一部に敗者復活戦が採用された変則方式で、一度は天王寺に負けた市岡が大阪代表になっている。

甲子園球場ができたのは、この5年後のことだが、もし東が全国大会に出ているなら、ずっと知名度が上がったかもしれない。

### 伝説の4兄弟

### 三人の兄は医者・知事に

天王寺高校在籍時はマネジャーで、野球部OB会では広報担当の吉野征志さん(65)は「私は昭和35年の入学なんです。私が、入学式で校長が、我が校にはかつて、東3兄弟といつて、全員が天王寺から東大を経た優秀な兄弟がいた」と、調示されたことを覚えています。と、半世紀前のことを振り返った。実際には4兄弟なのだが、どうした



追悼試合で、撮影年度は不明

ことが卒業生は、3兄弟で記憶していた。校長が間違えたのか、今となっては確かめようもない。学校関係者に聞いても「4兄弟なのに、卒業生の方々は皆さん、そんなはずはない。3兄弟や」と口をそろえられます」と、首をひねる。

東4兄弟は全員が一高を経て東大進み、3人の兄はすべて医者になった。中でも長兄・龍太郎は、のちに東京都知事を2期務めている。あるOBは「東京五輪が開催されたときの知事ですわ」と、さも自慢げに話す。

また、兄は全員、ポーター選手として名声を博した。ところが武雄は腕力が弱くてポーターをあきらめ、野球を選んだという。野球選手としては超一流なのに、兄たちと比較されてしまい、存在感がやや失せてしまったのだろうか。さらに野球に関する記録以外の資料が見当たらず、東がどんな人物だったかが、さっぱりわからない。仮に東が存命なら110歳に近く、同級生やチームメイトを見つけるのも困難だ。

めっていたころだ。多数の野球雑誌が出版されていたはずだし、これを取り寄せていた東が、最新の情報を得ることは、十分考えられる。

ただ、日本球界のフオークボールの元祖は、戦後に活躍した中日・杉下茂大正から昭和初期にかけて、すでに日本で投げられていたピッチャーがいたことになれば、野球界の新事実発掘ということになる。

東大卒業後の東の経歴も、ほとんど分からなかった。時期は不明だが、フイリピン・ミンダナオ島にあった日本企業に勤務し、そのまま現地で応召している。そして終戦から間もない11月に、島の収容所で戦病死したことが、ようやく確認された。



「野球界」の表紙を飾った東大の東武雄(左)、右は明治のエース湯浅禎夫

探すのをやめるとき、見つかるのもよくある話で——と、井上陽水の「夢の中へ」のようなことが起きる。

千葉県船橋市に「吉沢野球博物館」という個人が設立した施設があって、とりわけ戦前の資料や雑誌が多数保管されている。別の取材で足を運んだ際、

## いねみせいのココマ

